



第39回

ふたつのクリスマス

※2023年1月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 2

2011年の正月、バルト3国の一つであるエストニアを訪ねた。旧ソ連の構成国で初めて欧州共通通貨・ユーロを導入した直後の表情を取材するのが目的だった。首都タリンでインタビューした大統領や、多くの市民は「欧州の一等国の証し」を手に入れたと喜びにひたっていた。

取材を終えた晩、旧市街を訪ねた。広場の中央には、雪化粧したクリスマスツリーが凜として輝いていた。正月にツリーなのか？ 不思議に思い訪ねると「正教会は1月7日にクリスマスを祝う」と知らされた。街では、クリスマス休暇を利用したロシアからのツアー客の姿が目立った。

レーニンはロシア革命の年の1918年2月、ユリウス暦からグレゴリオ暦に改暦した。その際、13日ほど日

時を早めた。ただ、現在もクリスマスはユリウス暦で祝う。新暦の12月25日は、旧暦では13日ずれて1月7日になる。

正教徒が多いウクライナも1月7日がクリスマスだ。だが、ロシアが侵攻する事態を受けて「ロシアと同じ日にクリスマスを祝いたくない」という感情が湧き起こる。近年では、12月にクリスマスを祝う動きも始まった。

レーニンだけでなく、権威を示そうと権力者が改暦を実施する例は多い。古くは紀元前46年にカエサルがユリウス暦を制定、フランス革命後には革命暦が導入された。スターリンもレーニンの死後、週5日制のソビエト連合暦を一時的に採用したことがある。

日本では、政府が明治5年11月8日、グレゴリオ暦の採用を布告した。月の

満ち欠けをもとにした太陰太陽暦から、太陽暦への大転換のため、ずれる日数も大幅だった。明治5年の12月はわずか3日間しかなく、翌4日が明治6年1月1日となった。2023年は改暦から150年の年である。

突然の改暦は不評だった。改暦を官報のように淡々と1面トップで伝え、た幣紙の前身である東京日日新聞は、改暦発表から4日後の紙面に、月が隠れるという意味を持つ「晦日^{みそか}」に月が出るなら「四角い玉子」もあるだろうと皮肉る記事を書いた。太陰太陽暦では15日は満月、晦日は月が出ないのが決まり。改暦により、これまではありえなかった事が起きるかもしれない。そんな庶民の戸惑いを伝えた。

ともにエストニアの隣国であるロシアやウクライナといった旧ソ連圏だけでなく東欧にも正教徒が多く住む。欧米文化が徐々に浸透したセルビアでは「12月と1月の両方ともクリスマスを祝うのが新しいスタイル」と聞いた。平和に戻り、ウクライナでもふたつのクリスマスを祝える日が来ることを願いたい。